

Richard King, *Orientalism and Religion:
Postcolonial theory, India and the 'Mystic East'*
London, New York: Routledge, 1999, 283pp.

富澤 かな

サイードの『オリエンタリズム』以来、東洋を西洋と対置し、分析・差異化・支配する言説の問題が様々に論じられてきた。本書がテーマとする「神秘なる東洋」という表象は、この言説の核ともいうべきものである。そして『オリエンタリズム』がもたらしたもう一つの常識が、言説の問題はそのまま権力の問題である、という認識である。本書もまた「神秘なる東洋」という言説の政治性を明らかにする。しかし、キングは権力論への還元を求めているのではない。文化論と権力論の分離を超えて、宗教・文化・権力相互の重なり合いを論じる方策をさぐるのである。つまり、本書は東洋と西洋の分離という問題を、文化論と権力論の分離を超える語りをもって、論じようとする試みである。いわば二重にオリエンタリズムを超えようとする試みなのである。

本書は焦点を特に「神秘なるインド」の表象に絞っている。インドはこの問題において特別な意味を持つ。インドこそは、宗教文化論と政治権力論の分離という問題がもっとも強く意識されてきたフィールドであるからだ。

インドへのアプローチには常に二つの本質論がつきまどってきた。それは、デュモンに代表されるような宗教文化論からのインド理解と、マルクスの権力論からのインド理解とである。インドは聖なる宗教の世界なのか、あるいはアジア的専制の世界なのか。文化・宗教が政治・権力を包摂するのか、あるいは政治・権力が文化・宗教を包摂するのか。この二つの本質論とその乖離からの脱却というテーマを長く抱えてきたのがインド研究なのである。この乖離は文化研究と歴史研究の乖離と重なっている。旧来の学問分野の壁を超え、そして植民地的言説を超え、聖俗の分離を超え、「インドなるもの」を求めてしまう本質論的な欲求を超えて、なおインドを知ろうとする様々な努力がなされている。本書はその多様な成果を踏まえつつ、新たな道をさぐろうとする。

東洋／西洋の対置と、宗教文化論と政治権力論の乖離とを同時に問題とすることで、根底に見えてくるものがある。それは宗教性と世俗性の分離である。オリエンタリズムの理解に「宗教」という概念の理解が不可欠であることがここに明らかになる。

キングは「宗教」が世俗性と対をなすものと定義され、政治や権力などの世俗的な要素から切り離されてきたことを重視する。「宗教」は神との超越的な関わりであって、歴史性や社会性とは本来関わりのない次元のものである、という前提が問題なのである。宗教性と世俗性を分離・対置する前提があるからこそ、宗教文化論と政治権力論との乖離も生じる。宗教をめぐるこの分

離の現象こそが、あらゆるオリエンタリズム的な分離の理解の要となるのである。キングによれば、この分離の最大の契機は啓蒙主義にある。啓蒙主義は、理性礼賛の基本姿勢のもと、世界に合理／非合理の分離に連なる二元論を持ち込んだ。彼は以下のような図式を提示している。

公 — 客観的 — 哲学・科学 — 制度的宗教 — 世俗 — 合理 — 男性
私 — 主観的 — 宗教 — 個人的宗教（神秘主義） — 聖 — 非合理 — 女性

世俗性から切り離された「神秘的」で「超越的」で「非合理的」な「宗教」の理解がここに確立する。近代の宗教理解は全てこの分離の前提の上に成り立ってきた。宗教性を世俗的政治性に従属させるマルクス主義者も、逆にあらゆる世俗性を超える宗教性を想定するエリアードのような宗教学者も、結局はこの分離を前提するという点では同質だとキングは考える。彼は<宗教→世俗><世俗→宗教>のどちらの還元も拒否し、その分離自体に疑問を呈することから、オリエンタリズムの超克を目指すのである。

この分離を見ることで「神秘なる東洋」の表象の持つ意味が明らかになる。近代西洋は東洋＝神秘とすることで、宗教・神秘・非合理性などのあらゆる他者性を東洋に仮託し、逆に世俗的で客観的で合理的な自己像を構築したのである。つまり東西の分離・対置は、西洋の近代思想が合理的な自己像の構築にあたり、「宗教」なるものを異質なものとして囲い込み、疎外し、周縁に位置づけたことと、完全に連動しているのである。この思考の分離の動きの全体がオリエンタリズムであり、この全体を論じ、崩すことが本書の意図なのである。

オリエンタリズム問題を、宗教性と世俗性の分離の問題から理解しようとする本書の仕事は、文化理解・オリエンタリズムなどの、昨今様々に論じられている問題を、宗教学と、特に世俗化論に接合するものと見ることができる。「宗教」を還元不可能な本質と見る姿勢と科学的に分析しようとする姿勢との間で揺れ動き、宗教性と世俗性の分離の問題にこだわってきた宗教学という分野の意義と可能性をキングは重視している。彼は冒頭でこの著作は「ポストコロニアル理論と比較宗教学との接点（インターフェイス）」を探るものであると言っている。しかし本書を、宗教学やインド研究へのポストコロニアル論やオリエンタリズム論の援用、ととらえては不十分であろう。本書における「オリエンタリズムと宗教」のつながりはもっと根元的なものだからだ。「オリエンタリズムと宗教」という題の意味はここにある。本書は「宗教」概念こそを鍵として、オリエンタリズムを理解し、超える試みなのである。

本書は以下の九章からなっている。

第1章 定義の力——「神秘」概念の系譜学

The power of definitions: a genealogy of the idea of 'the mystical'

第2章 宗教概念と宗教学の形成

Disciplining religion

第3章 聖典・解釈学・世界宗教

Sacred texts, hermeneutics and world religions

第4章 オリエンタリズムとインドの宗教

Orientalism and Indian religions

第5章 近代の神話としての「ヒンドゥーイズム」

The modern myth of 'Hinduism'

第6章 「神秘なるヒンドゥーイズム」——ヴェーダーンタ思想と表象=代表の政治学
'Mystic Hinduism': Vedānta and the politics of representation

第7章 オリエンタリズムと「仏教」の発見
Orientalism and the discovery of 'Buddhism'

第8章 私事化の政治学——インドの宗教と神秘主義研究
The politics of privatization: Indian religion and the study of mysticism

第9章 オリエンタリズムを超えて?——ポストコロニアル時代の宗教と比較の可能性
Beyond Orientalism? Religion and comparativism in a postcolonial era

キングはまず「宗教」「神秘」の概念の検証に着手する。世俗性と切り離され対置される「宗教」概念は、啓蒙主義を契機に確定されたにせよ、その淵源はもっと古く遡る。「宗教 religion」という言葉は、そもそもは祖先や神に関わる諸伝統をくくる寛容で多元的な概念であったが、ユダヤ・キリスト教の排他的な唯一神信仰の文脈上で、神との個人的で排他的な関係、ただ一つの信仰、を示す概念に変容した。このユダヤ・キリスト教的宗教概念が、私的で主観的で非合理的な「宗教」概念の基盤である。そしてそのような個人と神との関わりを示す概念が「神秘主義 mysticism」である。これも本来キリスト教の概念であり、その結果、唯一神との個人的な関係が前提となり、言語を超えた超越的な経験という面が強調される。これが啓蒙主義を経て、非合理性、非社会性などの一連の「宗教」イメージの核になるのである。

キリスト教の文脈上に生じ、啓蒙主義の文脈で一連の意味づけを与えられたこれらの概念がやがて、世界の多様な現象にあてはめられ、そこに様々な問題が生じることになる。それぞれの現象を「宗教」「神秘主義」として囲い込むことで、文脈、歴史、政治などから切り離し、固定した本質であるかのように扱ってしまうのである。そして東洋=神秘の等式により、東洋世界全体を、文脈、歴史、政治などから切り離し固定した本質として扱うことになる。こうして「宗教」概念の疎外が東洋の疎外と連動し、「オリエンタリズムと宗教」の問題が生じるのである(1章, 2章)。

この「宗教」概念のゆがみは、「宗教」を研究する方法論の問題にも当然直結している。ここでキングは宗教研究とテキストの関係を論じる。文献学や、テキスト読解に偏した研究が、オリエンタリズム的で本質主義的であるとしてしばしば批判されるが、キングはこの問題にも先に述べた宗教観が関係していると指摘する。キリスト教をモデルにして近代に形成された宗教概念が「他宗教」の理解に適用された結果、キリスト教の聖典重視、テキスト重視の姿勢も同時に持ち込まれ、その文字表現の偏重が、脱文脈的で非歴史的な宗教イメージを強化したとするのである。しかし彼はテキスト分析が無意味であるというわけではない。ただそこに伴う西洋的・キリスト教的な前提を意識することを求めるのである。

では、「西洋的・キリスト教的な前提を意識すること」、分析概念や思考の偏りを意識することが、対象の理解にどこまで意味を持つのか。研究者に単なる免罪符や安心感を与える以上の意味はあるのか。この問題をキングはガダマーの解釈学を足場に論じている。ガダマーは客観性の可能性を否定し、解釈から何らかの偏見を取り除くことは不可能であるとする。しかしそれによって解釈が不可能であるという悲観的な結論に至るわけではない。むしろその偏見を表に出すことこそが解釈の可能性をひらくと考える。解釈者の偏見とその文脈を明らかにする作業と、テキストの

細かな文脈を明らかにする作業とが平行してなされ、解釈者とテキストのそれぞれの地平が重なるところに解釈が成立すると考えるのである。本書におけるキングの作業はまさに解釈者（＝自己）の文脈を解き明かすものである。この作業こそが、対象（＝他者）の文脈に向かう可能性をひらくと期待されるのである（3章）。

以上のように分析概念と分析可能性を検証した上で、4～7章では具体的に「神秘なるインド」の表象の問題が論じられる。「ヒンドゥーイズム」なるインドの本質が措定され、ヴェーダーンタ思想などの「神秘主義」がインドの本質として過度に重視され、インドに宗教性・非合理性・反近代性などのあらゆる他者性が仮託されていった過程が明らかにされている。そこには常に、ヒンドゥーイズムなり仏教なりの「本来の」姿、「本質」を求めようとする姿勢があった。これは世俗性の切り捨てやテキストの偏重と深く結びつき、方法論のレベルからインド研究を方向付けてきたのである。

ここで注目すべきは、この本質論的なインド像・宗教像の形成と維持に、インドの、特に知識人達が果たした役割の重要性である。オリエンタリズム批判は時に、「オリエントとは単なる西洋近代の言説の産物にすぎない」という極端な論によって、この問題を隠蔽してしまう。しかしそれこそは東洋／西洋の分離の再生産になってしまう。東洋の主体性を剥奪する言説を告発する発言が、かえって東洋の主体性を二重に否定してしまうという矛盾が生じうるのだ。この問題は以前より、特にサバルタン・スタディーズの文脈で論じられてきた。キングはその成果を踏まえ、この矛盾を回避すべく、西洋起源の諸概念の上に生まれたインド像や宗教像が、東西双方の様々な立場からの発言の交差の中で再生産されていった様をとらえようとしているのである。

キングは研究者が常に自己を対象化し自省していくこと（self reflexivity）に、研究の可能性を見ている。彼は冒頭で、本書は西洋自らを人類学の対象とする試みであるとも言っている。このような姿勢はいわゆるポストコロニアルの思想やカルチュラル・スタディーズに特徴的なものであり、本書の最終部分は、これらの理論を幅広く扱い、そこから今後の研究のあり方を模索している（8章、9章）。しかし本書は、単にカルチュラル・スタディーズの一つとしてくられ得るものではない。キングは政治や宗教性に全てを還元することを否定するが、同様に文化の語りにも全てを還元できるとも考えていない。キングが目指すのは、自省を繰り返し、自らの内の本質主義や偏見を意識しこれに抗しつつ、宗教・文化・権力の相互の重なり合い（The mutual imbrication of religion, culture, and power）を理解しようとする試みである。自己と対象の双方の文脈を明らかにして、宗教・文化・権力の概念の分離を超えて解釈を形成する試み、それが可能であると示そうとしているのである。

本書が持つ意義は読む者によって様々であろう。本書は革新的な概念や複雑な論理を提示するのではなく、様々な分野の理論を平明に整理しそこから問題を深化させるというスタイルをとっているため、幅広い読者層に訴えるものになっている。昨今のポストコロニアル論の見取り図を与えてくれる格好の書ともいえるし、宗教学の基礎概念や方法論の成り立ちを実証的に解き明かし今後のあり方を示唆する書でもあるし、地域研究と文献研究の壁を超え、インド研究の基礎的問題を共有し新たな視座を得るための指針となる書ともいえる。そして何より、これらの分野の壁自体を対象化し、あらゆる知的営為の今後の可能性を模索する手がかりを与えているところに本書の意義がある。そしてこの領域横断的な可能性は、キングが自らのポジションを意識し「戦

略」をもとうと意識したからこそひらけたものと思われる。それはインドをテーマに、東洋と西洋の分離という問題を、文化論と権力論の分離を超える語りをもって、論じようとした戦略、語りの内容と形式のふたつのレベルから、二重にオリエンタリズムを超えようとした戦略である。

オリエンタリズム問題が言説の権力性の問題であり、文化研究の方法論自体への問いかけであるということは、サイドの『オリエンタリズム』ですでに明確にされていたことである。つまり東西の分離・対置という問題を、方法論自体の自省の上に考えるのは、当然の帰結と言える。なぜならオリエンタリズムとは結局は我々の思考法のことであり、インドの語り・宗教の語りの次元と、それを扱う者の論理の次元とは全く同次元であるからだ。しかし、宗教研究やインド研究に携わる者が実際にこれを考える場合には、自らのオリエンタリズム的な面を一度意識し反省することで一種の免罪符を得て、元通りの研究に回帰しかえってこれを強化する、というレベルに陥りやすかったのではなかろうか。その中であって、本書の最大の意義は、オリエンタリズムと宗教とインドとの関わりを根元的にとらえ、東西の分離・対置の理解・超克と方法論の変革という問題を、意識的に連動させ同時に論じることで研究の地平をひらこうとした戦略にある。そしてこの戦略は、自らの立場をどこに置き、何を目標に研究をするのか、という意識と意志の強さを要請するものであるように思われる。キングの戦略はイギリスのインド宗教研究者たる彼の立場に見合った戦略であり、この戦略の存在がこの書を漠然と批判や相対化を繰り返すだけのオリエンタリズム批判とは質を異にするものになっていると思われるのである。

果たして本書の戦略は、際限ない批判の繰り返しを超えゆく何らかの道を示すことに成功したのか。その成否は読む者一人一人が判断することとなる。しかし少なくとも、ともすれば漫然とした反省や批判に陥りがちな「本質主義」や「宗教概念」などの問題を具体的に検証し、その淵源を明らかにした本書の試みとその戦略に学ぶものは大きいはずである。宗教、文化、権力を考えようとするあらゆる者にとって、本書が一つの指標となることは確かであろう。